

小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働授業の実践

——第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の報告——

三沢 大樹

要旨：常葉大学教育学部附属橘小学校の1年生を対象に、ディズニーのアニメーション映画「ファンタジア 2000」を教材化した音楽鑑賞の授業を行った。実施に当たり、大学教員である筆者がゲストティーチャーの音楽家となり、先行研究を参考に「子供・教師・音楽家の三者協働」、「カリキュラムの位置付けと継続性」、「ゲストティーチャーとのコミュニケーション」の三観点に着目して、担任教諭と協働しながら約2か月間をかけて準備を行った。授業実践後に児童たちが記入した鑑賞カードに見られる記述等の特徴を概観したところ、多くの児童たちは本授業実践を通して主体的に鑑賞活動を楽しんでいることを推察するに至った。結果として本授業実践の題材目標は概ね達成されたと判断するに至った。

キーワード：小学校音楽科，社会に開かれた教育課程，音楽鑑賞，ゲストティーチャー

1. 緒言

新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが謳われており、その実施に当たっては、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったり、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが示されている。音楽科に於いては、これまでも地域の人的資源との協働による実践や、公共文化施設、財団、大学等が主催する「音楽アウトリーチ」活動を活用したりした、演奏家や音楽家等をゲストティーチャーとして学校に迎え入れる実践事例等が、比較的多く報告されてきたものと思われる。

この度、筆者は、初等教育課程の教職科目「授業実践演習（1年次後期）」の一環として附属小学校で授業実践を行う機会を得た。実施に当たり、筆者がゲストティーチャーとなり、担任教諭との協働による鑑賞の授業を計画した。本稿では、授業実践の概要報告とともに、授業後に児童が記述した鑑賞カード（ワークシート）の様相から、本授業実践の学習成果等を俯瞰する。そして、音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働授業の成果と課題に関する知見を得ようとするものである。

2. 音楽科とゲストティーチャーに関する先行研究

学校に音楽家をゲストティーチャーとして迎えることの意義として、音楽家が入ってくことで、教師と子供の関係性を変化させることが挙げられる。これは、従来の教師と子供がコミュニケーションを取り合い、互いが影響し合う関係（図1）から、音楽家が入り込むことにより、子供・教師・音楽家の三者という新たな関係（図2）が生じるということであり、例えば教師と音楽家ばかりでなく、子供と音楽家が影響し合うという関係が生まれるほか、子供と音楽家の交流から教師が発見したり、学んだりするという効果も現れる。音楽家が入ってくことで新たな関係性が生じることとなり、この関係性の中では、

子供・教師・音楽家の三者が如何に協働するかが鍵となる（林，2019）。また佐野（2019）は，ゲストティーチャーとの協働による効果として「生の演奏に触れる機会」，「専門的な学習」，「音楽鑑賞教室では得られない体験」を挙げる一方で，協働の課題として「人材の発掘」，「カリキュラムの位置付けと継続性」，「ゲストティーチャーとのコミュニケーション」を挙げている。今回の授業実践では，これらの意義，効果，課題を踏まえて準備を進めることとした。但し，佐野の指摘する「人材の発掘」の課題に関しては，本授業実践が大学側のカリキュラムに位置づけられていることと，実践校となる附属小学校は日頃より大学の研究実践校の役割を担っていることから，今回は該当しないものと考えられる。よって，本実践では「子供・教師・音楽家の三者協働」，「カリキュラムの位置付けと継続性」，「ゲストティーチャーとのコミュニケーション」の三観点に着目しながら，約2ヵ月間をかけて授業準備を行った。

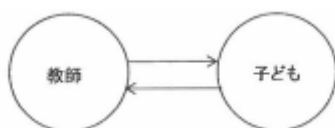


図1 二者の関係図 [林（2019）より転載]

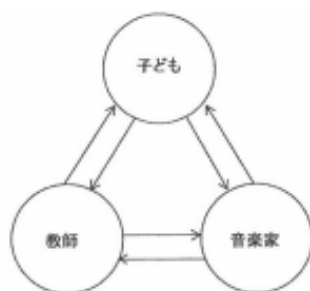


図2 三者の関係図 [林（2019）より転載]

3. 実践概要

令和2年11月21日（土），常葉大学教育学部附属橘小学校（以下，実践校）に於いて鑑賞の授業実践を行った。対象者は1年2組の21名（男児11名／女児10名）である。林（2013）は，教師が子供に体験させたいものと，音楽家が提案するプログラムについて，事前に話し合いをしてすり合わせをすることが，学校でのアウトリーチを成功させるひとつの鍵であることを明らかにしている。また，一般にゲストティーチャー側の課題として，特に低学年の授業では担任教諭の協力が必要不可欠であるとも言われている。今回の授業実践では，事前に担任教諭と2回の打ち合わせを行い，更には担任教諭による音楽科の授業を2回見学させて頂いた上で当日を迎えた（図3）。1回目の打ち合わせでは，コロナ禍に於ける例年とは異なる音楽科の学習状況（後述）や児童の様相等の情報を受け取りつつ，担任教諭と積極的に意見交流を図った。2回目の打ち合わせでは，筆者から授業プランの草案を提示した。授業見学に関して，当初は，児童たちが音楽活動に取り組む姿を筆者が感覚的に把握することを目的としていたが，2回目の授業見学では筆者も補助教諭として学習活動に参加し，ピアノ伴奏等を担当することとなった。結果として，本授

業実践のゲストティーチャーである筆者（＝音楽家）と児童たちが、事前にコミュニケーションを図る良い機会となった。

担任教諭との打合せ（10月）

- ・学習状況等の把握、意見交流（1回目）
- ・授業プラン(草案)の提示（2回目）

担任教諭による授業の参観

- ・児童の姿の把握（10/28）
- ・学習活動への参加（11/7）

授業実践（11月21日）

図 3 授業実践までの流れ

また、児童の実態の特徴として、実践校では全児童がオーケストラ学習に取り組んでいることが挙げられる。低学年では、音楽科の通常授業（年間 35 時間）に加えて、オーケストラ学習（年間 70 時間）がカリキュラムに位置付けられており、児童は入学と同時にヴァイオリンかチェロの何れかを選択し、専門の指導員から指導を受けている。そのため、児童らは弦楽器を中心に、オーケストラ音楽を特徴づけている要素や仕組みを、学校生活の中で感覚的に捉えていると思われる。なお、コロナ禍に於いても、オーケストラ学習は例年通りに実施されていた。一方で、通常授業の学習状況に関しては、前述の打ち合わせの中で、担任教諭より「コロナ禍の影響により例年よりも遅れ気味であり、特に歌唱や鍵盤ハーモニカの活動が十分に実施できないこと」「クラスには音楽に合わせて動いたり踊ったりすることが好きな児童が多く、学習内容や活動が制限されていることから、特にリズム学習に力を入れてきたこと」「鑑賞の授業はこれまでに 1 回実施し、P.チャイコフスキー作曲《くるみ割り人形》より〈行進曲〉を聴いて思ったことをワークシートに記入する学習を行ったこと」との報告を受けた。

以上の実態を踏まえて、今回は「ピアノ・コンチェルトを かんしょうしよう」という題材名の下、江田（2016）の先行研究に倣い、20 世紀音楽を代表する作曲家の一人である D.ショスタコーヴィチが作曲した《ピアノ協奏曲 第 2 番 Op.102》第 1 楽章を主教材とする鑑賞の授業を行った。鑑賞媒体にはディズニーのアニメーション映画「ファンタジア 2000」より同楽曲の短編映画を使用した。この短編映画は、アンデルセン童話「錫の兵隊」をアニメーション化したものである。物語は、片足の勇敢な錫の兵隊が邪悪なびっくり箱から美しいバレリーナを救い出し、最後に 2 人は結ばれるという、原作とは結末が異なる内容となっており、演奏時間は 7 分 30 秒程度である。

先行研究の対象者も小学校 1 年生であるが、小太鼓やピアノの音色を感じ取って聴くことを学習内容とした実践である。今回の授業実践では、「ピアノ・コンチェルト第 2 番の曲想と音楽の構造との関わりなどに気づくとともに、聴き取ったことと感じ取ったことの関わりについて考え、曲や演奏の楽しさを見いだしたり、映像の各場面と音楽とを関連付けたりしながら、主体的にオーケストラ（ピアノ・コンチェルト）の音楽に親しむ」ことを題材目標として設定した。表 1 は、当日の授業概要を示したものである。導入活動には、筆者が補助教諭として参加した前時の学習活動を、更に発展させることで活用を図っ

た。教育芸術社の検定教科書「小学生のおんがく1」に掲載されている《はる なつ あき ふゆ》（三浦真理作詞・作曲）は、歌詞の内容に応じて表現を工夫する学習をねらいとして作曲されたオリジナル曲である。歌詞を読みながら各節の場面を想像する等の活動は、本時の主活動（学習）に向かう準備として適当な活動だと思える。主活動では、映像の視聴と共に、音楽上の主題が登場する場面や、物語が転換する場面等の、特徴的な8つの場面の画像を電子黒板に提示して、各場面の音楽（旋律）について発問したり、ピアノで確認したりしながら、各場面と音楽とを関連付けて鑑賞する学習を展開した。また、鑑賞カードの記入は、教室環境と授業時間の都合により、授業実践の直後の時間に担任教諭の指導の下で行われた。鑑賞カードはB5サイズのオリジナルのもので、児童の日頃の「書く力」を掌握している担任教諭に作成を依頼した。「じゅうにかきましょう」という指示文の下、鑑賞（視聴）した映像の「好きな場面」と「その理由」を記入する構成となっており、記入に不慣れな児童にも配慮して「〇〇が いいなとおもった。」「〇〇のイメージが つたわってきた。」等の記入例が4つ示されている。なお、今回の授業実践は、初等教育課程の教職科目「授業実践演習」の一環として計画されたことから、当日は履修学生（主に初等教育課程の1年次生）十数名が見学する中で実施された。

表 1 授業実践の概要（本時の授業の流れ）

	○学習内容 ・学習活動	■指導上の留意点 ★評価方法
導入	○前時の学習内容を振り返る ・ゲストティーチャーと共に、《はる なつ あき ふゆ》を身体で表現しながら歌唱する	■担任教諭による、ゲストティーチャーの紹介 ■前時までの学習活動を確認する ■児童の興味・関心の状況を確認しながら、複数回歌唱する
展開	○《ピアノ・コンチェルト第2番》を視聴し、印象に残った場面の音楽について確認する ・視聴する ・印象に残った場面について思い思いに考える ・オノマトペで歌唱し、ゲストティーチャーと共に前奏や第1主題等を確認する ・自分の中で印象に残っている場面の音楽（旋律）を、ゲストティーチャーのピアノで確認する	■予め「今日は少し難しい学習を行う」ことを児童たちに伝える ■ピアノ・コンチェルトの説明と、物語の登場人物3名の確認（視聴前） ■どのような物語だったか、内容と印象に残った場面について発問する ■前奏や第1主題について発問し、ピアノで確認したり、オノマトペで歌ったりする ■特徴的な8つの場面の画像を提示し、そのうちの幾つかは、場面の音楽（旋律）について発問し、ピアノで確認する
まとめ	○再度視聴する ・印象に残っている場面の音楽（旋律）に着目しながら視聴する ○授業後の活動を知る	★表情観察、行動観察、発言内容 ■教室に戻り、担任教諭と共に授業の感想（ワークシート）を記入することを伝える ★鑑賞カード（担任教諭が授業後の活動として実施）

4. 方法

ここでは、児童たちが授業実践直後に記入した鑑賞カードに見られる記述等の特徴を概観することを通して、学習の様相を導き出し、本授業実践の学習の成果等の確認を行う。鑑賞カードは、参加児童の全員から回収することが出来た。使用した鑑賞カードは「好きな場面」と「その理由」をそれぞれの欄に自由に記述して貰う形式を取っているが、各欄

に分けて記述されていなかったり，理由と同時にまとめて記述されていたりするものが一定量確認された。今回は，児童たちが事前に鑑賞の学習活動を1度しか経験していないことや，小学校1年生の段階の「書く力」を考慮する必要があると思われることから，該当する鑑賞カードに関しては，筆者が一人ひとりの記述を読み取り，児童が記述しようとしている「好きな場面」を可能な範囲で推察しながら判断をした。なお，次章に示す児童たちの文章（記述）に関しては原文のままの表記を基本とし，明らかに誤字脱字と判断できる場合に限り，筆者が加筆修正を行った。

5. 結果と考察

5.1 鑑賞した映像の「好きな場面」と「その理由」

表1は，児童が回答した「好きな場面」を回答数の多い順に示したものである。感想シートの中に「好きな場面」と「その理由」の記述が確認できたのは18名（85.7%）で，残りの3名には明確な書き分けが無かったり，記述自体が不十分であったりした。この表を見ると，11名の児童が「邪悪なびっくり箱が登場する場面」を好きな場面として挙げており，これは好きな場面の記述が確認できた児童の6割以上を占める。この場面は管弦楽の強奏和音とピアノのオクターヴによる最強奏で展開部が開始される箇所であり，直前にある歌調でやさしい第2主題に導かれて繰り上げられるバレリーナと錫の兵隊による穏やかなひと時が，邪悪なびっくり箱の登場で打ち破られる，音楽的にも物語の展開としても印象に残る場面である。記述の詳細を確認したところ，「びっくりしたけど おもしろかったです。その音は，ドンダーンダダダダーンみたいな音でした。」「ダンダンって音がしました。」等の，オノマトペ（擬音語）を用いた文章が多く確認された。また「バイオリンや ひくい音のピアノが でてきたとおもいます。」「大だいこのおとが ひびいていた。」等の，オーケストラの楽器の音色に関する記述も，比較的多く確認することができた。次いで「バレリーナと錫の兵隊が出会う場面」を回答した児童が3名（14.3%）である。回答者数が3名と少ないため，記述の傾向を窺い知ることは困難であるが，ある児童の記述には「くりかえし くりかえしの音がくが とても気に入りました。」という，第2主題の特徴であるモチーフの反復（音楽の仕組み）と関連付けながら鑑賞していることが推察される感想が確認された。以下は，少数意見であった。

表 2 映像の中の「好きな場面」 n=21

好きな場面	数
邪悪なびっくり箱が登場する場面	11
バレリーナと錫の兵隊が出会う場面	3
最後の決闘の場面	1
海に流されて魚に食べられる場面	1
邪悪なびっくり箱がバレリーナに花を捧げる場面	1
バレリーナが踊る姿	1
不明	3

5.2 記述内容の特徴（概観）

図4は，「邪悪なびっくり箱が登場する場面」を好きな場面として挙げた，ある男児が記述した鑑賞カードである。この図を確認すると，好きな場面の欄には「びっくりばこが

でてきたところ」と記され、その理由が丁寧に述べられていることが分かる。また、欄外には両手の五指を使いピアノを弾くゲストティーチャー（＝筆者）の姿が描かれている。このような欄外に物語の登場人物や筆者の似顔絵等の描画がされた鑑賞カードは9名（42.9%）の児童に確認がされた。以下の文章は、図4から理由欄の記述を抜き出したものである。

ドゥドルドン、ドゥドルドンという音がつよい音で とてもぶきみでした。バイオリンやひくい音のピアノがでてきたとおもいます。びっくりばこが きゅうにとびだしたところ。へいたいは、びっくりしていました。三さわ先生は、音がくがじょうずなので、ピアノがとてもじょうずでした。えいがのピアノをひくのもすごくじょうずでした。三さわ先生、またこんどの音がくもよろしくおねがいします。クルミわりにんぎょうのときは、おとだけけど、きょうはえいがもあって たのしかったです。

この男児の記述の中には、オノマトペ（擬音語）を用いた表現や、聴き取った楽器の音色に関する内容が確認できる。これは、「邪悪なびっくり箱が登場する場面」を好きな場面とする児童の記述の特徴として前項で示したものと一致する。このような、文章の中にオノマトペの表出が見られる児童は8名（38.1%）で、楽器の音色に関する記述は13名（61.9%）の児童に確認がされた。次に、ゲストティーチャーである筆者に対する感謝や賞賛の言葉が述べられているが、このような筆者に関係した言及は13名（61.9%）の児童に確認がされ、全てが好意的な内容であった。終末部分には、事前に実施された担任教諭による鑑賞の授業（教材曲：《くるみ割り人形》より〈行進曲〉）に触れながら授業の感想を述べているが、このような通常授業（含、オーケストラ学習）での学修内容に触れた記述は4名（19.0%）の児童に確認がされた。

図5は、ある女児が記述した鑑賞カードである。好きな場面は「バレリーナと錫の兵隊が出会う場面」を挙げている。この図を確認すると、理由の記述は欄外にまで達していることが分かる。このような欄外にまで記述をしたり、中には2枚に亘って記述したりしている鑑賞カードは8名（38.1%）の児童に確認がされた。また、左下には「みさわせんせいと こどもたち」と題名付けされた、筆者が児童たちと共に授業を行う風景の描画があるが、これは導入活動（《はる なつ あき ふゆ》を身体で表現しながら歌唱する）の風景を描いたものと思われる。以下の文章は、図5から理由欄の記述を抜き出したものである。

ふとい、つよいおとがでてきて、コントラバスや、バイオリンや、チェロのおとがでてきて、こわそうなばめんと、かわいそうなばめんと、うれしそうなばめんがあつて、いろなばめんができました。みさわせんせいのピアノがじょうずで、えいがもみれたし、えいがとおともきいて うれしかったです。おもったことは、たのしかったです、へいたいさんとバレリーナさんが いっしょにであつたところが よかったです。びっくりばこがこわくて ほんとうにびっくりしました。きょうのかんしょうが たのしかったです。やっぱり、おんがくはたのしいです。みさわせんせいと

小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働授業の実践
——第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の報告——

いっしょにやって たのしかったです。きょうは よい いちにちに になりました。あえて うれしくて ありがとうございます。

この女兒の文章を確認してみると、聴き取った音の強弱や楽器の音色といったオーケストラ音楽を特徴づけている要素について述べると同時に、視聴した幾つかの場面について感じ取ったことを記述している。そして、その中から特に好きな場面が「へいたいさんとバレリーナさんが いっしょにであったところ」であると、簡潔な理由と共に紹介をしている。今回の授業実践の主活動である鑑賞の学習が楽しかったことから「やっぱり、おんがくはたのしいです。」という自分なりの考えを導き出しており、文末にはゲストティーチャーとの出会いに感謝を示した記述も見られる。一方で、オーケストラ音楽から聴き取ったことと、映像から感じ取ったことを関連付けながら鑑賞することができたか否かを明確に判断できる記述は見られない。以上のことから、映像の各場面と音楽とを関連付けながら鑑賞しているとは言えないものの、「聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えながら、主体的にオーケストラの音楽に親しむ」ことが質的に高まった学習状況と考えられることから、十分満足できる状況として判断できる。

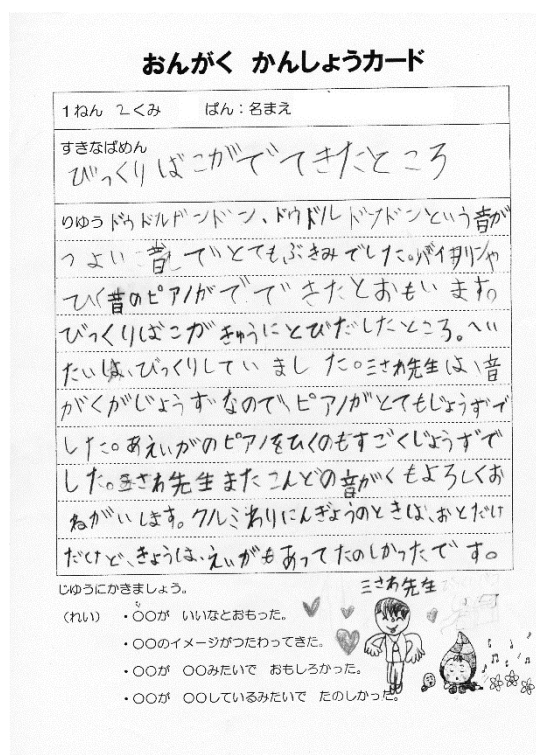


図 4 鑑賞カードの事例 1

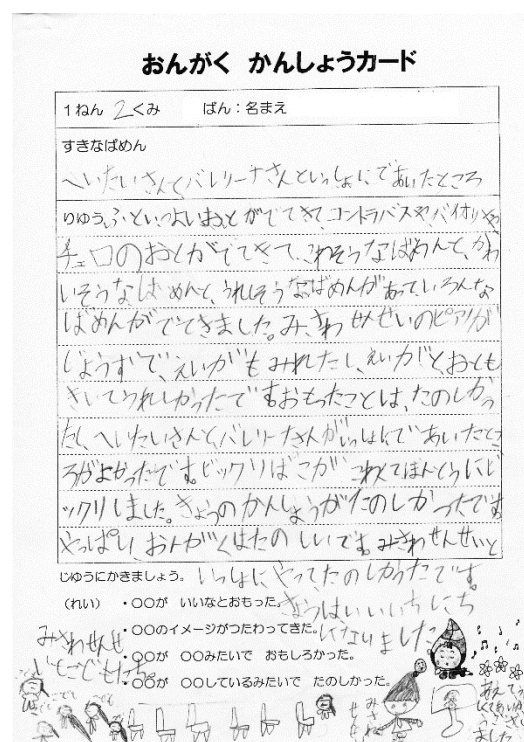


図 5 鑑賞カードの事例 2

5. まとめ

筆者はこの度、附属小学校の1年生を対象者として映像資料を教材化した音楽鑑賞の授業を行った。実施に当たり、筆者が音楽家としてゲストティーチャーとなり、先行研究を参考に「子供・教師・音楽家の三者協働」、「カリキュラムの位置付けと継続性」、「ゲスト

小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働授業の実践
——第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の報告——

ティーチャーとのコミュニケーション」の三観点に着目し、担任教諭と協働しながら授業設計をした。授業直後に児童らが記入した鑑賞カードの記述等を概観したところ、多くの児童たちが、自分の「好きな場面」の音楽について、オーケストラ音楽を特徴づけている要素や仕組みと関連付けながら、中にはオノマトペで表現したり、描画等の文字以外の表現方法を用いたりしながら、聴き取ったことや感じ取ったこと、曲や映像のよさについて、自分なりの考えを持ち、記述しようとしていることが分かった。このことから、参加した児童の多くは、本授業実践を通して主体的に鑑賞活動を楽しんだものと推察する。また、一部の児童には学習状況が「十分満足できる」と思える記述が確認された。よって、本授業実践の題材目標は概ね達成されたものと判断する。

なお、言葉や文字による表現が未熟な発達段階にある小学校1年生の児童たちが、欄外にまで自分なりの考えを記述したり、描画で自分の思いを表現したりしていることは、何らかの学習成果の表出であるものと思われる。このような所謂「行間」を含めた記述の分析に関しては、今回十分に取り扱うことが出来なかったため、今後の課題とする。

引用・参考文献

- 江田 司（2016）. 音楽授業の実際とその視点——「教師・子ども・教材」をめぐって——音楽教育実践ジャーナル, 13 (2), 98-101.
- 井上 和男・井上 頼豊（1982）. ショスタコーヴィチ 音楽之友社（編） 最新名曲解説全集 10——協奏曲Ⅲ——（pp.324-334） 音楽之友社
- 林 睦（2013）. 音楽教育におけるアウトリーチを考える——基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向—— 音楽教育実践ジャーナル, 10 (2), 6-13.
- 林 睦（2019）. 音楽家との楽しい出会いを——教師が工夫できること—— 季刊音楽鑑賞教育, Vol.38, 32-35.
- 文部科学省（2018）. 小学校学習指導要領（平成29年告示） 東洋館出版社
- 佐野 享子（2019）. 子どもたちに豊かな音楽経験を 季刊音楽鑑賞教育, Vol.38, 10-11.

謝辞

この度の授業実践研究では、担任教諭である常葉大学教育学部附属橘小学校教諭の佐野智子先生に多大なるご協力を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

付記1

本稿は、全国大学音楽教育学会関東地区学会 2021 年度第2回研究会（オンライン開催）に於いて発表した内容を基に、新たな視点で分析と考察を実施し、再構築したものである。

付記2

本稿の研究内容並びに授業実践は、常葉大学 2020 年度共同研究（研究テーマ：橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究 代表者：出口憲）、常葉大学 2021 年度共同研究（研究テーマ：同じ 代表者：富永弥生）の研究助成を受けたものである。